

## ◆研究概要

ディーセント・ワーク(働きがいのある人間らしい仕事)や人とモノ・技術との望ましい関係のあり方について長年に渡り関心を持ち続けてきました。

ディーセント・ワークに関しては、主に、作業負荷の適正化、セクシヤリティと職場における心身の健康などの問題に関心があります。また、人とモノ・技術との望ましい関係のあり方に関しては、主に、使いやすいモノのデザインといった人間工学的な問題や高度技術社会における技術倫理の問題などに関心があります。

近年は以下のような研究を行ってきています。

## ■研究テーマ

### 1. 女性における荷物取扱い作業時の作業負担に関する研究

女性就業人口の増加や、女性が就労可能な職域・職務の拡大によって、女性が身体的負担の高い荷物取扱い作業に従事する機会が増えていきます。しかし、作業に対する安全対策に関わる知見は十分には得られていません。そこで、荷物取扱い作業時の背部、肩腕部、脚部の負担における性差を明らかにするために、単独および複数の作業者によって荷物の積み下ろし、運搬作業を行う際の心身への負担について筋電図、心電図、負担感などを測定指標として検討を行っています。

### 2. 精神作業負担の定量的評価に関する研究

精神作業を行うことによって生じるストレス反応を定量的に評価し、精神作業負荷の適正化に導くことは、作業関連性の心血管系疾患を未然に防ぐ上で重要です。この点について、脈波、負担感などを指標として作業負担の評価を行っています。また、心血管系のストレス反応の動態は負荷する作業の性質によって一律ではないことが示唆されているた

心理系専攻

准教授

さとうのぞみ

佐藤 望

nozomi.satoh@socio.kindai.ac.jp



<http://researchmap.jp/read0181539/>

め(例えば、作業負荷によって血圧は上昇しても、心拍数が増加する場合もあれば、減少する場合もあるなど)、作業の性質と心血管系のストレス反応パターンとの関連性を明らかにし、適切な評価指標の体系化を目指した研究を行ってきています。

### 3. 介助式車椅子操作時における身体的負担の軽減に関する研究

高齢化にともない高齢者の車椅子利用者が増加しています。この状況に付随して車椅子の介助者も増加していくことが推測されます。これまで自走式車椅子については、操作者の身体的負担軽減化や安全性確保の観点から多くの研究が実施され、仕様の改良や路面整備などに対する配慮事項の提案がなされてきています。一方、介助式車椅子については、同様の問題に関する知見は十分には得られていません。以上の理由により、平面やスロープの昇降といった異なる床面移動条件下で介助式車椅子を操作した時の介助者の身体的負担を筋電図、心電図、負担感など測定指標として研究を行いました。

#### 4. 歩行補助車における把持部の形状と身体的負担との関係に関する研究

高齢化にともない高齢者の歩行補助車利用数は急速に増加することが予想されます。歩行補助車を用いて屋外を移動する場合、スロープ上の歩行時や段差を乗り越える際などに、上半身や手首関節部に負担がかかることが考えられます。そこで歩行補助車における把持部の形状と上半身の筋負担との関係を明らかにすることにより、無理のない力、姿勢で操作できる歩行補助車の把持部の形状について検討するために筋電図などを測定指標として研究を行いました。

#### 5. 職場におけるセクシャル・マイノリティのメンタルヘルスに関する研究

近年、ダイバーシティマネジメントの一環として、また、セクシャル・マイノリティへの人権的配慮に対する社会的責任の認識の高まりなどにもなって、セクシャル・マイノリティの雇用促進に取り組む組織が増加する傾向にあります。しかしながら、当事者が抱える心理的困難に対する職場での理解が不十分であることによって、当事者がメンタルヘルスの不調に陥るケースも少なくありません。この問題解決に向け、当事者に対する心理学的支援やセクシャルハラスメント防

止に向けた組織的取組の必要性を明確化するための研究に着手しました。心理学的なアプローチに加え、セクシャルリティのコマーシャリズム(商品化)による偏見や差別の助長に関わる問題について社会学的観点からの考察も試みています。

#### 6. 超高齢社会におけるソーシャルキャピタル向上のための支援体制創出に関する研究

学内の共同研究プロジェクト(認知症高齢化社会の質の向上のための医工文理アプローチによる研究)のサブテーマとして、認知症患者とその家族を地域で支えていく仕組みづくりに関する共同研究に着手しました。医療診断技術の飛躍的な進歩にともなう認知症の早期告知は認知症進行の遅延化を図るためのケアをより効果的にとる上で重要なプロセスだと考えられます。一方、早期告知により、日常生活に急激な変化がもたらされることから、深刻な心身の不調に陥る方も少なくありません。この問題解決に向け、医療診断技術の急速な進展が患者や家族に及ぼす影響を心理学的観点に加え、生命倫理的観点、医療社会学的観点などからも考察し、認知症の早期発見・告知後における患者と家族を地域で支援するための方策を提案することを目指して研究を行っています。

### ●論文など

Sato, N. (2015). Considerations on diversity management for sexual minorities in the workplace. In Yamamoto S. Shibuya, M., Izumi, H., Shih, Y.H., Lin, C.J., Lim, H. K.. (Eds.), *New Ergonomics Perspective*, (pp. 251-255). Boca Raton, FL; CRC Press.

Sato, N. (2014). Sex differences in physiological and psychological load during manual handling task. *Proc. of Asia Pacific Industrial Engineering and Management System*, CD-ROM.

### ▲趣味

インラインスケート、ランニング、伝統工芸鑑賞、香道など

### ◆ゼミの宣伝

作業負担の軽減化、モノのデザインと使いやすさ、感性の定量的評価といったテーマに研究関心があるゼミ生が多く所属しています。研究テーマ・研究手法の選定ではゼミ生の自主性を尊重していますが、主に実験的手法を用いて研究に取り組みたい人が志望されることを期待しています。